

賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」 (その8)

1934(昭和9)年9月号(下)

鈴子と将来を約束して、東助は福島に帰っていく。

1934(昭和9)年10月号

東助「疲弊のどん底」にある故郷で、一步踏み出す。



監修 **堀越芳昭**
山梨学院大学 元教授

中央会訪問後、日比谷の地下室食堂で食事しているときに、東助が病気になった時に助けてくれた浦江夫人と小浜里子に会う。東助は鈴子を二人に紹介し、雑談する中でここでも二人に助けてもらう。食事後、二人きりになった東助と鈴子は、変わらぬ愛とここ一、二年の目標について確認する。そして、鈴子の見送りを受けて、東助は貨物自動車で故郷を目指す。

東助を待っていたのは、貧乏を絵にかいたようなわが家であり、「疲弊のどん底」ともいうべき故郷であった。東助は、長野県上田市、東京で学んだ立体農業や産業組合の話をして農村更生のヒントを提供する。青年団、処女会有志が動き出す。

■ 東助と鈴子、変わらぬ愛などを確認した後、東助の故郷に向かう

立木と東助、鈴子の三人は、産業組合中央会を辞したあと鈴子の提案で日比谷に出て、ある有名な地下食堂で昼食をとることになった。三人は鰻丼(うなどん)を注文し、膳が来るのを待っている間に、鈴子は次のようなことを言い出した。

「わたし、産婆になりたいと思っていますが、福島県の山奥に、産婆の必要があるでしょうかね」

銀鈴のように澄みきった彼女の言葉は、東助の魂の底までしみこんだ。

「無料で、奉仕的にやってあげるのであれば、産婆の需要はいくらでもあり

ますよ。子どもは始末におえないほど、たくさん産むんだから、わはははは」

鈴子の反対側にすわっていた立木は、賢そうな瞳を光らして言った。

「産婆さんも、農村の産業組合の利用部の仕事としてやれば、いい社会事業ができますよ。わたしのほうでも、消費組合の内部で、利用部の仕事に産婆さんを雇ってありましてね。いい成績があがっております。ぜひ、農村のほうで、そうした計画をお進めになるといいですね。(略)」

そういう話をしていると、鰻丼と吸い物が運ばれてきた。それと同時に、若い女性が二人、隣のブースに着席した。最初は気がつかなかったが、首を伸ばした東助は、その二人が、病気の時に世話になった浦江夫人と小浜里子と確認した。

東助は、鈴子を二人に紹介した。五人で話しているうちに次のことが決まった。

一つは、「消費組合を助けてほしい」という浦江夫人の懇願に鈴子が応じ、鈴子は浦江夫人のところに引き取られることになった。二つは、小浜里子の助言によって東助の福島への帰りが「汽車でなく、貨物トラックを利用し、9時ごろ新宿から出る」ということであった。

立木が去り、注文したカレーライスを食べ終わった浦江夫人と小浜里子が買い物に行くと言って、そこを立ち去った。

二人の姿が消えると、鈴子は、東助に身体をすり寄せて、小声に言った。

「東助さん、こんなに落ちぶれてしまったわたしを、まだ、あなたは思っていますか？」

東助は、彼女の手を握って言った。

「ぼくは男だよ。いったん約束した以上、その女の上にどんな不幸が起ころうと、ぼくは約束を変えやしないよ。たとえ、きみが死がいになって帰ろうと、きみはぼくの妻だ」(略)

「わたしはきっと、りっぱな産婆さんになって、あなたの妻として恥ずかしくない女になりますわ。だから、ここ一、二年の間辛抱しててくださいね」

「そりゃ、こちらから言うことだよ。今、きみをすぐ田舎に連れて帰っても、食わすことができんからなあ。きみも精出して勉強したまえ。一、二年たつうちに、ぼくも産業組合を作り上げて、きみを迎えに来るから」

二人は変わらぬ愛とここ一、二年の目標について確認した。

その晩の9時過ぎ、各種の雑貨を積んだ貨物自動車は、福島に向けて新宿を

たった。激しい吹雪だったので、見送りに来たのは鈴子一人であった。

東助は、長野県上田市、東京で学んだことを実践に移すため故郷を目指した。胸に熱くたぎる想いが次から次へとあふれ出したであろう。



■「疲弊のどん底」の村で農村更生のヒントを提供する

1934(昭和9)年10月号は「寂しき炉辺」という小見出しで始まる。

半年ぶりに、父母の前でかわいい弟や妹の顔を見ることを楽しみにして我が家に戻った東助の目に映ったのはあまりの貧困さだった。

なんという貧乏！ なんという窮迫だろう。わが家に足を一步踏み込んだとき、想像にあまる窮乏に、東助の胸は暗くなった。

父は三里ばかり山奥の桧原に出稼ぎに行って留守であった。母はリュウマチで寝ていた。東助がいつも考えていた妹のみや子は、東京に売られていた。十四になる花子も、群馬県の人絹工場に女工に行ったとかで、姿を見せなかった。尋常小学校を卒業したばかりの六三郎は、椀の木地を作る桧原の工場へ父に連れられて行っていた。それで、家に残っている者は、九つになる敏子と、四才になる留吉であった。

さらに母は、「三年越し、クワにやる肥料代を払わなかったので、わずかに残っていた山を、会津若松の肥料屋にみんな、去年の春、とられてしまった」、そのために囲炉裏にくべる薪がないという。

翌日、薪を拾いに行ったとき佐藤巡査から

「田中君、しばらくだったね、きみがないので、青年団は火が消えていた

ようになっていたよ。いつ帰ってきたんだね？」

と声を掛けられ、東助は「けさ東京から帰った」ことを報告すると佐藤巡査は続けた。

「きみが半年ほど留守のうちに、村はもう疲弊のどん底におちいってしまって、食えない家がたくさんできたよ。ことに街道筋に沿っているところで満足に食える家は、数えるほどしかないだろうね。……いいところへ帰ってきてくれた。もう一ぺん青年団を起こして、農村更生の実をあげようじゃないか。」

東助の家だけでなく、村全体が貧窮化していることを知らされた。巡査と別れて一時間ほどたって、東京に売られているみや子の学校友だちである田中高子が、母の見舞いに来てくれた。見舞いは口実で、東京の様子を聞きたいために東助に会いに来たのである。東助は東京の若い婦人が、消費組合運動に熱心であることなどを話した。

それから東助は、さらに、自分がことしの正月、医療組合の病院で病気をなおした話をした。そこでは普通の病院で百八十円もとるような盲腸炎の手術が、わずか三十五円で治療されていること、一日の薬価がたった十銭であること、それでも経営がたっていくことなどを相当詳しく話した。彼女はそれを聞いてびっくりしていた。それは彼女の父が胃がんで死んだとき手術料に三百円もとられ、入院料に千円近く支払った経験があったものだから、舌を巻いてびっくりしたのであった。

彼女は、村の処女会の常任幹事をしていたので、その話を処女会の幹事にだけでも話してくれないかと、東助に頼んだ。

その結果、次の晩、田中高子の家で、処女会の委員が集まることとなった。話がまとまり、彼女が去ってすぐ、小学校時代の同級生の島貫伊三郎が訪ねてきた。彼は「農村更生の道は、どうしたらいいか、研究してきたことを教えてくれ」と東助に頼んだ。

それで、東助は、信州あたりの産業組合青年連盟の若い人たちが計画している立体農業の話、産業組合の話、有畜農業の話、医療組合の話、東京中ノ郷質庫信用組合の話などをとりまぜて、薪を割る合間合間に、ぼつりぼつり、島貫に話した。(略)

「そうだ、東助君、きみが言うとおりの。この村には産業組合さえない、それが疲弊の根本なのだ。一つわれわれが奮発して作ろうじゃないか。きみ、

どうだね、あすの晩あたり、村の青年団の連中を、みんな集めるから話してくれんかね。」

処女会の幹部に産業組合の話をするとう田中高子に約束をしていることを告げると、島貫は青年団と処女会の共催を提案し、東助も了承する。

こうして若い人たちが産業組合を中心にして、農村更生に向けて動き出す。しかし、農業恐慌、村の生活習慣などの影響を受けてそう簡単には進まない。次回以降、それらに苦しみながらも、頑張る東助の行動等を追っていきたい。

<参考文献>

『家の光』(昭和9年9月号、10月号)

*文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』(2009年)を参考にした。